

古仏語版『秘中の秘』とウスタシュ・デシャンの養生術

瀬戸直彦

9世紀後半に記されたとされるアラビア語原典から、君主の鑑として西欧各国語に翻訳され、また翻案されてきた『秘中の秘』*Secretum secretorum* という作品群は、その骨格をアリストテレスによるアレクサンドロス大王への書簡という形式にとり、16世紀のルネサンス期以前まできわめて広範に読まれた書物であった。その内容は、王による統治の方法を教えるだけでなく、王の守るべき食養生、哲学論、家臣や顧問団を選別するさいに有用な人相学といった分野がしだいに付け加えられて、一種の百科全書に成長した。

ラテン語による翻訳は、アラビア語版にすでにあった二種のヴァージョンをもとに、短いヴァージョンと長いヴァージョンによりなされた。前者はヨハンネス・ヒスパレンシスによる西方(スペイン)系のもので12世紀の前半、後者はフィリップス・トリポリタヌスによる東方(小アジア)系のもので13世紀の前半に成立したとされる⁽¹⁾。前者は王の養生術に主体をおくもので、便宜上「省略版」、後者を「完全版」と称しておく。

私は、オック語版養生術の、省略版に属するヴァージョンに見られる驚くべき反女性主義的な部分を「シュナミティスム」(「ダヴィデ王の療法」)の一例とみなして、その源泉(スルス)がラテン語の一部のヴァージョン、それも完全版の中にすでに存在したことを2013年の論文で指摘しておいた。胃を暖めるための養生として美しい娘を抱いて寝るというモチーフである。本稿では、主としてモンフランやザミュネールによる研究をもとに、中世の北フランス語における『秘中の秘』のなかにおける養生術を検討し、14世紀末から15世紀初頭にかけて翻案された流布版 *vulgates* 中になおシュナミティスムが残っていること、しかし、それが通俗的な教訓詩ではなく、文学として享受される場合には、当時の女性嫌厭思想の影響を受けつつ、14世紀の詩人ウスタシュ・デシャンにおいて、合理的で現実的な養生術に収斂されていくさまをいくつかの作品をとおして検討してみたいと思う。

I. 古仏語版『秘中の秘』における省略版と完全版

ラテン語版の伝本は省略版・完全版ともに数百におよび、それらはフリートリヒ・ヴルムスのドイツ語とラテン語による散文写本の『秘中の秘』の研究(1970年)と、15世紀以前の偽アリストテレスの写本を対象にしたシュミットとノックス(1985年)による一覽で一応まとめられてい

る。それらを換骨奪胎した俗語の写本の方においても、ラテン語写本ほどの数ではないにしても、相当数の伝本が残っている。いっぽうヘブライ語版、スペイン語版、ロシア語版のようにアラビア語から直接、ラテン語を経ないで成立したとされるものもある⁽²⁾。

俗語版については、北仏語の写本について概括したジャック・モンフラン（とくに1982年の論考）、ならびにロマンス語における写本のコーパスを精力的に研究しているイラリア・ザミュネールの研究が重要であろう。とくにザミュネールの2005年に発表した「偽アリストテレスの『秘中の秘』におけるロマンス語の伝承—諸ヴァージョンと写本の目録」という論文は、ロマンス語各語の写本につき、アラビア語版からラテン語版に至る経緯をまとめた上で、省略版と完全版を収録する写本を断簡零葉を含めて網羅的にカタログ化した貴重なガイドとなっている。各写本は、北仏語、オック語、スペイン（カステイーリャ）語、アラゴン語、ポルトガル語、カタルーニャ語に分けて解説を施し、それぞれ所蔵地・所蔵図書館別に分類してある。

ザミュネールは完全版・省略版の別を大文字・小文字で表す。そのリストによると北仏語の写本は完全版においてヴァージョンが10あり、それをF₁-F₁₀で示す。写本数は56である。省略版には3ヴァージョンあり、これをf₁-f₃で示し、写本数は4である。いっぽう中世のオック語では、韻文と散文合わせて2ヴァージョンの省略版しかなく、これをp₁、p₂とする。前稿（2013年）で私が検討したスシエとルッジエーリのテキストはp₁に属する。写本数は6である。

もっとも完全版・省略版の区別は微妙であり、内容の点で原理的に完全版は省略版を含むから、厳密な区別は不可能ともいえる。また、ラテン語写本にしてもロマンス語写本にしても、その数は暫定的なものにとどまる。たとえば北仏語の写本については、トニー・ハントにより新たに報告された2断片があり、それらは、f_{3b}、f_{3c}としてザミュネールの2007年の論文では追加されている⁽³⁾。しかし、一応の目安としてこのリストはたいへんに貴重なものといえよう。

さて、北仏語版では、最も古い主要な3ヴァージョンをF₁からF₃とする。順にアングロ・ノルマン方言によるピエール・ダヴェルノンのもの（BnF. fr. 25407）⁽⁴⁾がF₁、おそらくイングランドのドミニコ会士ジョフフロワ・ド・ヴァターフォール⁽⁵⁾が翻訳してワロニーのセルヴェ・コバルが綴った「最も興味深い」（ラングロワ、モンフラン、アルベール・アンリがこれに一致して与える形容）とされるBnF. fr. 1822（ほかに断片あり）がF₂、そしてこれもアングロ・ノルマン方言による、ラテン語版完全版に最も近いとされる完全版がF₃（BnF. fr. 571が代表的な写本）となる。

F₂についてつけ加えておこう。第1部が、君主の備えるべき倫理、第2部が、君主の守るべき食養生、第3部が、君主のそろえるべき家臣団の構成、第4部が、君主がその指南役を選ぶための人相学に分かれている。二人の著者は、それぞれの部に加筆をほどこし、そのスルスを原則として明記しているのが特徴である。モンフランがその校訂はほぼ完成しているの述べていたのに、けっきょく出版にいたらなかったものである。1927年にCh.-V. ラングロワによる的確な紹介が

ある。

そのうち第1部にかんしては、モンフランが1964年の論考でラテン語のスルス（源泉）との比較を詳細に行った。第2部については、やはりモンフランが1982年の論考でその構成とスルスを検討している。いっぽうアルベール・アンリはモンフランの未刊に終わった校訂版の草稿を利用して、食養生の部のとくにワインについての叙述（fol. 110bis v(b)-114r(a), §§57-64）につき、校訂と語彙の注解を試みている。ワインの年代、色、味わい、香り、ボディー、アルコール度数、ぶどうの育つ土壌の順に配置されている部分で、アンリによれば『秘中の秘』のラテン語版（完全版）を合理的に並べかえて「科学的」なワインの解説になっているという⁽⁶⁾。他にスルスとして、ユダヤ人イサーク Ishaq Israeli ben Salomon (Issac Judaeus) の *De Diaetis*、ガレノス、ヒポクラテスなどを利用している。信用のおけない情報は、ラテン語のスルスにあったとしても削除し、正しいと判断した情報のみを訳したという。また、トニー・ハントによって2000年に報告されたこの作品の断片写本⁽⁷⁾（別の写本の製本のさいに用いられた遊び紙として用いられた）には、植物（果物）を使った食養生とその医学的な特徴、また人相学の一部が記されていた。ハントによれば前者のスルスはやはり、ユダヤ人イサークのラテン語訳とヴァンサン・ド・ボーヴェの『自然の鑑』*Speculum naturale* であり、後者のスルスは、偽ヒポクラテスの『人相学』*Physiognomia*（じつはラシの *Liber ad Almansorem* かららしい）である⁽⁸⁾。

ワインの箇所にみられるような配慮が全体にゆきとどいていとすれば、オック語版に特徴的であったシュナミティスムの部分など入り込む余地はないかもしれない。なお、このヴァージョンには、ジョフロワとおなじ Waterford 生まれの James Yonge による1422年の英語訳が存在する⁽⁹⁾。

II. シュナミティスム

さて、ザミュネールはその分類の中で14世紀末から15世紀初頭にかけて翻案された「流布版」を F₉、F₁₀とする⁽¹⁰⁾。ちなみに F₄は短い省略本で London, BL, Royal 20 B V という写本のみに残る。F₁の BnF. fr. 25407と同じく、ベッカーレッジの校訂がある⁽¹¹⁾。F₅はイタリア語混じりのフランス語版でバツピの校訂のある孤本である⁽¹²⁾。F₆も孤本で BnF. fr. 24432、F₇は4写本あり、F₈は極度の短縮版で3写本に残り、いずれも校本はない。これらについては、ザミュネールのまとめを参照されたい⁽¹³⁾。

F₉は流布版2つのなかの古いほうで11写本が残る。F₁₀はより新しいものだが、現存の写本が24（さらに抜粋版1、1497年のヴェラルー Vêrard による印刷本⁽¹⁴⁾）ある事実をかながみると、より広範に読まれたらしい。それぞれ、ヘルメナウ、マンザラウイ、モンフランがヴァージョン B、ヴァージョン C と呼んでいたものである⁽¹⁵⁾。その F₁₀に、F₁₋₃には見られない⁽¹⁶⁾、シュナミティスムが登場するのである。前稿で私はオック語版に見られるそのモチーフを検討し、ラテン語版

には一部登場していることを指摘しておいた。アラビア語版から直接に訳されたとされるヘブライ語版には見当たらない。それをもとにしたスペイン語版にも存在しないようである⁽¹⁷⁾。

前述したフリートリヒ・ヴルムスの1970年の博士論文では、ラテン語の諸版の分類が試みられている。基準となるモチーフを18ほど定めて、そのあるなしによる分類である⁽¹⁸⁾。8番目は、(*tunc medicina est ponere super ventrem camisiam calidam ponderosam*) *aut amplectere puellam calidam speciosam. (Si vero eructuationem sentis...)* という部分⁽¹⁹⁾を写本が収録しているか否かという基準であった。

モンフランによれば、F₉ (ヴァージョン B) に対して F₁₀ (ヴァージョン C) を分ける基準は、この「ダヴィデ王の療法」が含まれていることと、身体の諸部分をあつかう箇所で「眼について」の代わりに「腹部について」という古いテキストをもつということであった。ラテン語版でこの F₁₀ に最もよく適合するのが、次の2写本であるという⁽²⁰⁾：1) Oxford, Bodl. Rawlinson B. 149 [Wurms no.192, p.86; Schmitt/ Knox, p.68によると fol. 26v-130v (13世紀末)], 2) Prague, Universitní Knihovna (SKCSR), V. H. 9 [Wurms no.193, p.86; Schmitt/ Knox, p.70によると, fol. 38-78v (14-15世紀)]。ヴルムスがリスト化したラテン語の写本287⁽²¹⁾のなかで45写本から、8番目の基準に入るものを26あげている。モンフランがそれらすべてを精査した上で2写本をあげたのかどうか、確かめるすべはない。しかしラテン語写本におけるシュナミティスムについて網羅的に調べるなら、ヴルムスのリストに入ったこれらをまず確認しなくてはならないであろう。

モンフランのリストはそのままザミュネールの目録にもとりいれられている (F₁₀)。そのうちフランス国立図書館所蔵のものは8写本である。試みに BnF. fr. 1087を参照してみよう⁽²²⁾。モンフラン、ザミュネールともに、これを完全版の改変版とみなしている。判型の小さい一段組みでミニアチュールの付された美しい写本であり、『秘中の秘』は1r-91rに記されている。46vに睡眠の方法 (*De la maniere de dormir*) の章があつて、その中に以下の一節がある (斜体は筆者による強調。以下おなじ)。

Et si tu sens aucune douleur ou ventre ou a l'estomac, lors pour souveraine medicine mettz une chemise chaude sur ton estomac ou sur le ventre, ou *mettz entre tes braz une belle pucelle*. Et si tu avoyes les rotz de la bouche trop aigrement, saiches que c'est signe de froidure a l'estomac. Lors pren et boy eaue chaude avecques ung pou de syrop aigre, car (...) (47r)

「そしてもし汝が腹か胃になんらかの痛みを感じるなら、至高の薬としてそなたの胃あるいは腹の上に暖かい衣類を置くか、あるいはまたそなたの両腕のあいだに美しい娘を置くのがよい。そして口のなかに強い酸味のあるおくびが出たら、それは胃が冷えた徴候だと知るがよい。その場合は少量の酸っぱいシロップとともに暖かい水を飲むように (...)」

この一節の後に四季の健康法がきて、各季節を女性の年齢にたとえるのはアラビア語やラテン語の古いヴァージョンにおけるのと同様である。たとえば冬(53vから)については、「そしてそなたの胃が弱らないように、食べ過ぎたり女性と同衾しすぎるのを控えるように」(*et te garde de trop menger ne de trop avoir compaignie de femme, que ton estomac ne soit affebli*. 54r-v)。

そしてその後(57v～)から、身体の各部位の解説が始まる。ところで私にはいま英語版を仔細に検討する余裕はない。しかし、マンザラウイが『秘中の秘』の9つの英語訳を校訂したなかで、その7番目に収録された『王と王子たちの統治についての秘中の秘と呼ばれる書』*The Booke of the gouvernaunce of kings and princes called the Secret of Secretes* (University College, Oxford MS. 85, fol. 36-68) (15世紀後半)と8番目のロバート・コープランド Robert Copland (1547年歿)による1528年の印刷本のテキスト『アリストテレスの秘中の秘』*The Secrete of Secretes of Arystotle* (Cambridge University Library, STC 770)を対照してみた⁽²³⁾。いずれもフランス語版のヴァージョンCを訳したものとされている。前者にはこうある。

And yf thou feele any soore in the baily or in thy stomac, than, for a souerayne and counfortable medycyne, take a warme shert and ley it vpon [thy stomac], or elles *take in thyne armes a faire maide and holde hir surely*. Latinge thi wite, that trauayle before meyte is good, and yiveth heete to the stomac, but aftir meite it is contrarie (...)

コープランドの訳を見ると、ここの「そなたの両腕のなかに美しい娘を抱いてその子をしっかりと抱えていなさい」が省略されている。各文化圏において、どの時代にどのようにテキストが換骨奪胎されたのかを知ることができるわけである。

Ⅲ. ウスタシュ・デシャンの養生術

ウスタシュ・デシャン(1346年ころ—1406年ころ)の全作品は、作者の死後ほどなく友人のアルノー・ド・コルビー Arnaud de Corbie の依頼によってパリの写字生ラウル・タンギー Raoul Tanguy の書写した写本(BnF. fr. 840番)によって伝えられている。現存の作品数は1501にのぼる。これを校訂したクー・ド・サンティエールは第5巻(1889年)までを担当し⁽²⁴⁾、その死後はガストン・レイノーが第6巻から11巻までを担当した。第11巻はデシャンの生涯と全作品の研究・解説篇になっている。作品には写本の収録順に1-1498の番号が付されている。それらのなかで養生術にかんするものを5つほどあげておこう。番号順で、708番のヴィルレー(疫病に対処するための忠告, 40行)、1162番のバラッド(疫病について, 24行)、1417番の書簡(高等法院の判事3名に宛てたという体裁, 138行)、1452番のバラッド(疫病に対するもの, 30行)、そして1496番の教訓詩(「人間の身体において健康を保つための有名な教訓について」, 226行)である。

ここではそのうちで1162番のバラッドと1496番の教訓詩を検討してみたい。1162番は短いので全文を掲げる。なおこれら2作品は、BnF. nouv. acq. fr. 6221という別写本にも収録されている。2014年にCl. ドーフアンによるデシャンの作品のアンソロジーが刊行されたが、この2作品は収録されていない。

Qui veult son corps en santé maintenir
 Et resister a mort d'epidemie,
 Il doit courroux et tristesse fuir,
 Laisser le lieu ou est la maladie 4
 Et frequenter joieuse compaignie,
 Boire bon vin, nette viande user,
 Port bonne odour contre la punaisie
 Et ne voist hors s'il ne fait bel et cler. 8

Jeun estomac ne se doit point partir,
 Boire matin et mener sobre vie,
 Face cler feu en sa chambre tenir;
 De femme avoir ne li soviengne mie; 12
 Bains, estuves a son pouoir devie,
 Car les humeurs font mouvoir et troubler;
 Soit bien vestus, ait toudis chiere lie,
 Et ne voist hors d'il ne fait bel et cler. 16

De grosses chars et de choulz abstenir
 Et de tous fruiz se doit on en partie,
 Cler vin avoir, sa poulaille rostie,
 Connis, perdriz, et pour espicerie 20
 Canelle avoir, safran, gingembre, et prie
 Tout d'aigrevin et vergus destremper,
 Dormir au main; ce regime n'oublie,
 Et ne voist hors s'il ne fait bel et cler⁽²⁵⁾. 24

自分の身体の健康を維持し
 疫病による死から逃れたい者は

怒りや悲しみを避け	
病気の蔓延する場所を捨てて	4
楽しい仲間と日々暮らして	
よいワインを飲み新鮮な食物をとり	
感染を避けるためによい芳香をつけて	
そして天気がよくなければ外に出ないように	8
胃が空のまま外に出たり	
朝から酒を飲んだり節制の過ぎた生活を送ったり絶対にしないように	
自分の部屋には暖かい火をおこしておく	
女性と交わることなど決して思ってはならない	12
できるだけ風呂や蒸し風呂は避けなさい	
体液を興奮させて乱すからである	
ちゃんと服を着てご馳走を毎日とるように	
そして天気がよくなければ外にでないように	16
極端な肉食を断ち キャベツや果物は	
すべからく少しだけにとどめ ⁽²⁶⁾	
よいワインと炙った鶏肉 ウサギ	
ヤマウズラを食べるように 香辛料としては	20
シナモン サフラン 生姜を使うこと そして	
酢や酸味のあるワインに何でも浸すように願います また	
朝寝をするように この養生術を忘れてはならない	
そして天気がよくなければ外にでないように	24

3詩節10音綴で各詩節の最終行がルフランとなり、abab bcbcという脚韻をもつ典型的なバラッドの構成である。この時期の中世フランス語の詩歌には、ギヨーム・ド・マショーの作品を始めとして反歌の付属していないことが多かった。ここで「疫病」*epidemie* (v.2) という語は、現実に13世紀中葉に猖獗をきわめていたペスト（黒死病）を想起しなくてはならないだろう。ペストを題材にした作品はデシヤンには他にもあるが、これはふざけたようであり、現実味をもった作品だと思う。

続いて1496番の教訓詩である。タイトルとしては *D'un notable enseignement pour continuer santé en corps d'omme* が写本巻末に付されている。*notable* という形容がなかなか示唆的では

ないだろうか。「昔からある」「かの有名な」といったニュアンスが見てとれる。デシャンとしては、皆が知っている例の養生術を自分も作ってみたというところであろうか。骨子は以下のようである。

「あなたの健康を維持するために 以下の規則を守るように」と始まる。ワインは軽くて赤くて濁りのないのを水で割って飲むように、その水は清水か泉に湧いたもので、沼の水は駄目と、まずワインの注意から結石の危険、そして長生きしたいならキャベツや豆や古いチーズは食べないこととある。肉や魚についての注意のあと、肉や魚の食べ過ぎ、そして食後の労働を諫める。「なぜならあなたの本性 *nature* が危険に陥るからである」(vv.44)。天气がよければ朝に戸外に出て運動をせよ。もし気候が悪ければ、家のなかなどで身体を動かし、とにかく楽しく生きることです。そして冬には厚着をしてすきま風が入らないよう、暖炉はよい火がおきるようにしておくこと。夏には冬と反対のことをして、寝床は綿布にして蚊にさされないよう注意。「そして食後に眠くなったら、すぐに寝るように。その前に身体を動かし、不消化や粘液、痰液を生む胃の飽満状態を避けるためです」(vv.84-89)。乗馬は午前中にすべきで、食事の後なら軽く行うように。「とくに自然の行為(同衾)のしすぎは、命にかかわるので避けるように」(vv.94-96)。

その後具体的な肉や魚や野菜をとるさいの注意がかなり長く記される。長生きしたい場合の、ミルクやバターを取り方。過食がいかに関に負担をかけるか。犬や狼のようにがつつ食べて命を縮める人が多いこと。なにごととも過度はよくない。小食の人は医者要らずである。「そして身体に不調を感じたら、医者のもとに行かなければならないが、瀉血や吸い玉療法にたけていてちゃんと薬を処方してくれる優秀な医者を見定める必要がある」(vv.206-210)。「私は忠告します。横になるさいは、眠っていようが目覚めていようが、仰向けに横たわって眠らないように。このことに注意をしないでひどいめに遭った人は多かつたし、これからも多いことでしょう。まず右を下にして、そして次に左を下にして眠るように」(vv.211-219)。「夜の食事は軽くして少量とれば、より快適に眠れます。頭も冴えてきます。多くの人間がこれまで息を詰まらせ死にました。夜に食べ過ぎたり飲み過ぎたり、香料入り甘酒 (*hypocras*) や食物やワインを暴飲暴食したせいである。私の食養生は以上で終わり」(vv.219-226)。

『秘中の秘』のほとんどすべてのヴァージョンにある養生術の部に共通して語られるモチーフがここに出てくる。『秘中の秘』と同じように、全体としていきあたりばったりで重複するところの多い叙述の仕方である⁽²⁷⁾。これはウスタシュ・デシャンの不手際ではない。これまでの伝統を踏まえた、「有名な」食養生に連なる作品だからであろう。古い養生術のいわばパロディーとして考えたい。そして、これらの作品の裏にかいま見られるのは、アリストテレスのアレクサンドロス大王への書簡ではないだろうか。作品番号99のバラッドを見れば、この書簡の伝統をデシャンは知悉していたことがわかる⁽²⁸⁾。新しく王位についたシャルル6世にたいして、王の側近としてのデシャンが、王としての心構えを間接的に説く内容で⁽²⁹⁾「良き者たちを愛せよ、苦し

む者たちに与えよ、必要なときには気前よくあれ」で始まる。反歌のついたこの作品には、比較的めずらしい各詩節に2行のルフランが付されていて、それらは「以上このような点はすべて、アリストテレスが偉大な王アレクサンドロスにかつて説明したところなのだ」*Car tous ces points fist jadis assavoir / Aristote au grant roy Alixandre.* で終わっている。バラッドの形式で忠告を与えるのにデシャンはたけていたというべきであろう。

また別のバラッドでも王侯貴族を相手に学問の優越性を説いて、「あれほどの権勢をもち、世界を自分の力のもとに服従させたアレクサンドロスにはアリストテレスから書簡を受けとることを望んだのだが、それほど彼（アリストテレス）は学者にして雄弁家なのであった」*Alixandre, qui tant ot de pouoir / Qui le monde soubmist en ses liens / D'Aristote vout lettres concevoir / Tant qu'il fut clerks et rethoriciens.* と述べている（作品番号356, vv.25-28）⁽³⁰⁾。

IV. ウスタシュ・デシャンの『結婚の鏡』

『秘中の秘』のシュナミティズムとデシャンをつなぐ女性蔑視について考察してきた。この観点からは『結婚の鏡』を欠かすことはできない。レイノーの校訂本第9巻全体を占めるもので、デシャンとしては最も長く12 104行ある（作品番号1498番）。1381から1389年ごろに執筆したらしい（未完）。女性および結婚への激越な風刺であり、女性批判で名高いマテオルスの『愁嘆の詩』*Lamentationes*（13世紀末）のフランス語訳やジャン・ド・マンに想をえたところが多く、のちの「ばら物語論争」に連なる反女性主義を示したものと一般にとらえられている⁽³¹⁾。

登場人物にはアレゴリーが用いられている。子孫を残すために結婚することを希望している「率直な望み」*Franc Vouloir* に対して、「運命」*Fortune* の友人たちである「狂気」*Folie*、「欲望」*Desir*、「学問一覧」*Répertoire-de-Science* といった登場人物が種々の忠告をする。とくにどのような結婚をすればよいかについて、様々の議論がかわされる。このテーマは16世紀のフランソワ・ラブレーにおけるパニユルジュの結婚問題とおなじであり、「率直な望み」は14世紀のパニユルジュにはかならないと言われることがある。著者 *l'acteur* が「率直な望み」の結婚問題にかんして、寓意の登場人物に教訓を垂れさせているからである。また、聖書とか神話における多くの挿話がモデルとして語られ、また歴史上の事件が引き合いに出されるが、最後の方になると百年戦争のクレシーやポワチエの戦いが「狂気」に導かれたこととか、いまはイングランドに幽囚の身となっているジャン王のことなど同時代の事件にまで言及される。

タイトルが *Miroir de mariage*（『結婚照魔鏡』とも）であるから、これはもちろん以前からの *speculum*「鑑（鏡）」という百科全書の伝統を引き継いだものであろう。内容が女性嫌厭の色合いが濃いために、後の『結婚15の楽しみ』に連なるコント集を想像するし、事実それに似た部分もある。だが先ほど検討した「有名な教訓詩」に語りの枠としては近いとも考えられる。

全97章ほとんど全篇をとおして反女性主義がみられる。その過激さは『結婚15の楽しみ』の比

ではない。私にとってとくに興味深い女性嫌厭ぶりが見られるのはつぎの部分であった。すなわち、29章（「いかにしてディアネイラはヘラクレスを毒の入った下着で殺したか」）、31章（「女性のもつ抑制の利かない熱気とその破廉恥について」）、44-45章（「若妻のいる遍歴の騎士とその結果起こること」）、「いかなる結婚が許されるか、そしてそれはいかなる場合か」、56章（「学問一覽」がその弟子である「率直な望み」に対して、狂った女性の与える快楽をさりげなく遠ざけるよう勧告したてんまつ」（聖書中の逸話から））、57章（「どうして女性の美しさが、すぐに萎れて乾いて香りと美を失い衰弱してしまうばらの花に喩えられるのか」）である。そのうちで第44章の一部（vv.4 287-4 337）をまとめてみる。

もしお前が若くして結婚していて妻のご機嫌とりばかりしていると、冒険の旅に出て得られるはずの名誉も武勲も得られなくなり、人々に軟弱男とののしられる。どうすればよいのか。むらむらするようなことがあっても、若い娘とは結婚するな。そしてあちこちを遍歴して騎馬試合やいくさに励むように。立派な騎士ぶりが認められたら、そのときこそ故国に戻るがよい。そして中年になってから中年の女性を妻にすればよい（*De moien eage la (= ta femme) prendras, / Et tu seras d'eage moien*: vv.4328-4329）。そうすればお前の家は安泰だ。もう妻のもとにずっと留まっても非難されることはあるまい。お前が世界をまたにかけて修行してきたことを皆が知っているからだ。

このあとの第45章では、「もしそなたが貧乏のなかにあって、その貧乏ゆえに騎士としての修行を重ねられないし、おまけによい働き口も見つけられないのなら、誰か金持ちの年増 *aucune riche vieille* を見つけなさい」から始まる。その女を妻にしてやさしいことばでもかけてやれば、お小遣いももらえて武者修行の旅に出られるだろう、何の心配もなくその年上妻に立派な男にしてもらえる。恥ずかしいなどと思う必要はない。その女性がお前の取り分を確保してくれて家政を取りしきり守ってくれるのだから。修行から戻ってきたら、もう貧乏の心配もない。そして彼女が死んだら、自分の跡目を継がせるために、子供を産めるような若い女性を妻にすればよい、と続く。

遍歴騎士の冒険という伝統的な騎士道精神のもとにありながら、妙に現実的な筆致ではないか。女性の年齢を実利的にとらえている。それ以前の養生術にあるような、あるいはオジル・デ・カダルスで見たような⁽³²⁾、4体液理論はもはや問題にされない。

※ ※ ※

ジョフロワらの古フランス語版 F₂ (BnF. fr. 1822) は、アルベール・アンリによって、そのワインの部分が合理的な配置の科学的な叙述だと評された。一種の実用書としての側面も備えていたのかもしれない。しかしそのジョフロワもワインについてこう述べている。ワインはすぐれた

葉に似ていて適量を飲めば身体によいが、度を越すと死を導く。ワインは蛇に似ていてこの蛇は「毒蛇」*tyrus* と呼ばれる。「というも人はこの蛇からテリアカ (*theriaca*: 解毒剤の一種) を作るのであるが、この蛇は毒をもっているからである。適度に飲めばワインはテリアカに似ているが、度を越すと毒になるからだ」⁽³³⁾。ワインを介して女性と蛇が繋がった。

このような女性蔑視は、底流としてラテン語版の養生術からデシヤンにまで及んでいる。ここでは検討できなかった、インドよりアレクサンドロスに送られた「毒娘」のモチーフもそのひとつである⁽³⁴⁾。もっともこれは養生術の部にはなく、完全版におけるアリストテレスの忠告に見られるものである。養生術が最も読まれたのは、スコラ哲学的な環境、とくに医学校においてであったことが指摘されている⁽³⁵⁾。しかしシュナミティスムのような迷信が実用になったとは思えない。養生術の系譜のいっぽうの極にあるデシヤンのそれは、当時の医学文献からこれを引き離して、古仏語にまで伝えられた、そして流布版としては15世紀にまで広まっていた「有名な教訓」を、みごとに文学的表現としてよみがえらせたものととらえられないだろうか。

注

- (1) 『秘中の秘』全体の概観とその中世オック語版による養生術の特色については、瀬戸 (2013), Seto (2015) を参照されたい。
- (2) 瀬戸 (2013), p.36.
- (3) Zamuner (2007), pp.168-169, 177. 古仏語の省略版についてはこの論考が最も詳しい。
- (4) Beckerlegge (1944 a).
- (5) この写本全体の内容とジョフロワについては、Hunt (2000), p.291を参照。
- (6) Henry (1986), pp.3-5.
- (7) Hunt (2000), pp.294-295.
- (8) BnF. fr. 1822, fol.137r(a) を参照。
- (9) Robert Steel, *Three Prose Versions of the Secretum Secretorum*, London, 1898, pp.119-248に収録されている (cf. Monfrin (1964), pp.509-510, n.3).
- (10) Zamuner (2005), p.54, pp.112-113.
- (11) Beckerlegge (1944 b).
- (12) cf. 瀬戸 (2013), p.37, n. 9.
- (13) Zamuner (2005), pp.52-54, 112-114.
- (14) Manzalaoui (1977), pp.226-312に、John Shirley による英語版 (*The Gouvernance of Kyngs and of Princes*) のもとになったとされる、フランス語版の5写本 (ヴェラルルの1497年版をも含む) を校合したテキストが掲載されている。一部のみでその底本は Cambridge University Library MS. Ff. I. 33における fol.3-10だけ (全63章のうちの14章まで) である。cf. Monfrin (1982), p.112, n.65.
- (15) Monfrin (1982), p.112, n.65 [Hermenau (1925), p.378; Manzalaoui (1977), pp.xxii-xxiii et 226-312 (BnF. fr. 1087について)].
- (16) 瀬戸 (2013), p.49.
- (17) cf. Gaster (1907); Kasten (1957); Bizzarri (2010) [スペイン語版のこの新しい校訂本には不注意な誤りが散見される].
- (18) Wurms (1970), pp.119-126. cf. 瀬戸 (2013), p.47. なお、Wurms の論文の借用にあたり、早稲田大学中央図

書館資料管理課の方々にお世話になった。しるしてお礼を申し上げます。

- (19) cf. 瀬戸(2013), pp.48-49.
- (20) Monfrin (1982), pp.92-93.
- (21) Wurms (1970), pp.26-116.
- (22) BnF. Gallica においてカラー版で写本に接することができる。
- (23) Manzalaoui (1977), pp.340-343. cf. p. xxxix-xl, xl-xliii, xlvii. なおこの校訂本には、ヴァージョン C におけるテキストの異同がわかるようにフランス語版のうちの Cambridge University Library MS. Ff. I. 33の冒頭目次部分 (fol.3-10) を他の4写本 (Vélarde の印刷本含む) と校合して載せてある。それによると当該部分は冒頭目次では第40章 (じっさいの本文では41章) の *De la maniere de dormir* のなかにあり、コーブランドでは *Of the maner to slepe* に当たる (University College の写本には目次がない) (*ibid.*, pp.242-243)。
- (24) 第5巻冒頭に、途中で逝去したサン・ティレールについてのガストン・パリシによる追悼文が掲載されている。タンギーの提供する写本が必ずしも信頼のおけるものではないことがわかる。
- (25) t.6 (1889), pp.100-101.
- (26) vv.17-18の *De grosses chars et de choulz abstenir / et de tous fruiz se doit on en partie* というテキストが、BnF. nouv. acq. fr. 6221では、*De grosse chair se doit on abstenir / et de touz fruiz de la plus grand partie* となっていて避けるべき食物のなかにキャベツはない (果物やキャベツが身体によくないとされていたことについては次を参照: *Le Régime du corps de Maistre Aldebrandin de Siennne, texte français du XIIIe siècle* (éd. Landouzy et Pépin, 1911), p.14)。ほかにもいくつかの異同がある (重要なものは: v.10 *sobre] douce*; v.21 *Canelle clous de girofle pourrie*)。
- (27) 主題が重複して現れるのは、伝承の過程でテキストをつぎつぎと重ねていったせいであろう。このことは Philippus Tripolitanus が完全版をラテン語訳するさいにも言えることである。彼は省略本も合体させたが、すでに省略版にあった部分が自分の元本である完全本にも出てきたとき、それを再び新しい文脈のなかに入れるのに躊躇しなかった (cf. Monfrin (1982), p.75, p.110, n.12)。同種のことが、各言語の多くの写本冒頭にある目次と、あとに続く本文との齟齬というカズレについてもいえる。目次が準備された段階以降に本文が追加されたのであろう (cf. ヘプライ語版: Gaster (1908), pp.1074-1075)。
- (28) t.1 (1878), pp.208-210; éd. Dauphant (2014), pp.90-93.
- (29) cf. t.1 (1878), p.365; t.11 (1903), pp.31-32.
- (30) t.3 (1882), pp.87-89.
- (31) 各章のスルスについては、レイノー版第11巻に詳しい。ところで、女性擁護の論陣を張ったクリスティーヌ・ド・ピザンがデシャンに宛てた書簡中でその弟子と称していたことは興味深い。夫を通じて公証人や王の秘書官と知り合いになっており、王家の伝令官であったデシャンと交流があったのかもしれない (cf. article sur Eustache Deschamps dans le *Dictionnaire des lettres françaises, Le Moyen-Âge*², p.431 (Paul Zumthor et Sylvie Lefèvre); Daniel Poirion, *Le poète et le prince, l'évolution du lyrisme courtois de Guillaume de Machaut à Charles d'Orléans*, Paris, PUF., 1965, pp.237-238)。
- (32) cf. 瀬戸(2012), pp.145-151, 158-159; *id.*, (2013), p.52.
- (33) Henry (1986), pp.16-17.
- (34) 瀬戸(2013), p.51.
- (35) Williams (2003), pp.185-187; Zamuner (2008), p.173.

書誌

BECKERLEGGÉ (Oliver A.), *Le Secrét de Secrez by Piere d'Abernun of Fetcham from the Unique Manuscript B.N.f.fr. 25407*, Oxford, Blackwell, Anglo-Norman Texts, no.5, 1944 (= 1944 a).
id., «An Abridged Anglo-Norman Version of the “Secretum Secretorum”», in *Medium Aevum*, t.13, 1944, pp.1-17

(= 1944 b).

- BIZZARRI (Hugo O.), *Secreto de los Secretos, Poridat de las Poridades – versiones castellanas del Pseudo-Aristoteles “Secretum Secretorum”*, Universitat de València, 2010.
- DAUPHANT (Clothilde), *Eustache Deschamps, Anthologie*, Paris, Le Livre de Poche (coll. Lettres Gothiques 32861), 2014.
- GASTER (M.), «The Hebrew Version of the “Secretum Secretorum”», in *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 10/1907, pp.879-913; 1/1908, pp.111-162; 10/1908, pp.1065-1084.
- HENRY (Albert), «Un texte œnologique de Jofroi de Waterford et Servais Copale», in *Romania*, t.107, 1986, pp.1-37.
- HERMENAOU (Willy), [c.-r. pour l'éd. de Steele: *Roger Baconi Opera hactenus inedita*, V, 1920], in *Zrp*, t.45, 1925, pp.375-382.
- HUNT (Tony), «A New Fragment of Jofroi de Waterford's *Segré de segrez*», in *Romania*, t.118, 2000, pp.285-314.
- KASTEN (Lloyd), *Seudo Aristoteles, Poridat de las Poridades*, Madrid, Talleres de Silverio Aguirre, 1957.
- LANGLOIS (Charles-Victor), *La vie en France au Moyen Age du XII^e au milieu du XIV^e siècle, vol. 3: La connaissance de la nature et du monde, d'après des écrits français à l'usage des laïcs*, Paris, Hachette, 1911, 2^e éd. 1927, pp.71-121.
- MANZALAOU (Mahmoud A.), «The Pseudo-Aristotelian *Kitāb Sirr al-Asrār*, Facts and Problems», in *Oriens*, t.23-24, 1974, pp.147-257.
- id.*, *Secretum Secretorum: Nine English Versions, volume I, Text*, Oxford University Press, 1977 (coll. EETS, 276).
- MONFRIN (Jacques), «La place du *Secret des secrets* dans la littérature française médiévale», in éd. W. F. RYAN and Charles B. SCHMITT, *Pseudo-Aristotle, The “Secret of Secrets”, sources and influences*, London, The Warburg Institute, University of London, 1982, pp.73-113.
- id.*, «Sur les sources du “Secret des Secrets” de Jofroi de Waterford et Servais Copale», in *Mélanges de linguistique romane et de philologie médiévale offerts à M. Maurice Delbouille*, Gembloux, 1964, t.II, pp.509-530.
- RYAN (William Francis) and SCHMITT (Charles B.), *Pseudo-Aristotle, The “Secret of Secrets”, sources and influences*, London, The Warburg Institute, University of London, 1982.
- RAYNAUD (Gaston) et le marquis de QUEUX de SAINT-HILAIRE (éd.), *Œuvre complète de Eustache Deschamps*, Paris, Firmin Didot, 1878-1904, 11 vols. (coll. SATF).
- SCHMITT (Charles B.) and KNOX (Dilwyn), *Pseudo-Aristoteles Latinus, A Guide to Latin Works falsely attributed to Aristotle before 1500*, London, The Warburg Institute, University of London, 1985, pp.54-76.
- WILLIAMS (Steven J.), *The Secret of Secrets: the scholaly Career of a Pseudo-Aristotelian Text in the latin Middle Ages*, An Arbor, University of Michigan Press, 2003.
- WURMS (Friedrich), *Studien zu den deutschen und den lateinischen Prosafassungen des Pseudo-aristotelischen “Secretum Secretorum”*, Dissertation zur Erlangung der Würde des Doktors der Philosophie der Universität Hamburg, 1970.
- ZAMUNER (Ilaria), «Per l'edizione critica dei volgarizzamenti provenzali dell'*Epistola ad Alexandrum de dieta servanda*», in *Scène, évolution, sort de la langue et de la littérature d'oc, actes du 7^e congrès international de l'AIEO, Reggio Calabria-Messina, 7-13, juillet 2002*, Roma, Viella, 2003, pp.739-759.
- id.*, «Il ms. Barb. Lat. 311 e la trasmissione dei *regimina sanitatis* (XIII-XV sec.)», in *Cultura neolatina*, t.64, 2004, pp.207-250.
- id.*, «La tradizione romanza del “Secretum secretorum” pseudo aristotelico. Regesto delle versione e dei manoscritti», in *Studi Medievali*, t.46, 2005, pp.31-116.
- id.*, [c.-r. pour S.J. Williams, *The Secret of Secrets*], in *Studi Medievali*, t.47, 2006, pp.722-733.
- id.*, «Les versions françaises de l'*Epistola ad Alexandrum de dieta servanda*: mise au point», in *La traduction vers*

le moyen français, actes du II^e congrès de l'AIEMF, Poitiers, 27-29 avril 2006, Brepols / CESCUM, 2007, pp. 165-184.

瀬戸直彦「人生の四時期—オジル・テ・カダルスとフィリップ・ド・ノヴァール」 in 『中世の時間意識』（甚野尚志・益田朋幸編）知泉書館，2012年，pp.143-165.

瀬戸直彦「『秘中の秘』覚え書き—その養生術（中世オック語版）について—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第58巻-2, 2013年，pp.35-56.

SETO (Naohiko), «“Bela domna ab fresca color”: misogynie occitane dans le *Secret des Secrets*», in *Actes du XI^{en} congrès internacional de l'Associacion Internacionala d'Estudis Occitans (Universitat de Lhèida, del 16 al 21 de junh de 2014)*, Universitat de Lhèida, 2015 (à paraître).